
うちの猫は魔法が使えません

麻上 椎弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うちの猫は魔法が使えません

【Nコード】

N3989BA

【作者名】

麻上 椎弥

【あらすじ】

魔法が大の苦手なサーリヤ（二十一歳）は、科学者の父から『海外に出るから持ち出せない研究データの管理を任せたい』と言われる。その数日後、やってきたのは父からの荷物……ではなく、男の子だった。サーリヤは突然訪れたその少年と一緒に暮らすことになるのだが――。外見年齢と実年齢が一致しない二人が周囲を巻き込んだり巻き込まれたりする、事件と魔法とアクションと不器用な思ひやりのファンタジー。※「R15」「残酷な描写あり」としていますが、そういった描写はちよくちよくしかありません。でもある

ときは結構がつつりです※

科学と魔法 01 (前書き)

この作品は作者がフリーダムに書いたため、一編ごとの濃度や空気が不安定です。

また作者はバトル描写もファンタジーも初挑戦ですので、温かい目で見てくれると嬉しいです。

科学と魔法 01

この世では、魔法が一般常識となっている。

学校には国語や数学に加えて『魔法』という授業があり、一部の職業には魔法が関係する世界だ。

だが、魔法が人々に馴染みあるものだから科学は関わりないのかと言われれば、そうではない。

魔法と共に科学も進歩が続けている。科学者の中には『魔法を科学で証明してみせる』と意気込んでいる者がいるとかいないとか。

学校は魔法学校と一般学校の二種類があり、一般学校が小中高で十二年なのに対して、魔法学校は一貫して十年制だ。つまり、小中高の制度がない上に総合的に二年少ない学歴となるのだ。

だからといって、学歴的に考えて一般学校に通っていた方がいいというわけではない。魔法は年々猛スピードで進化していき、後数年もすれば科学より魔法が主流の世の中になると言われている。ちなみに魔法学校と一般学校の割合は五分五分だが、魔法学校が大半を占めるようになるのも時間の問題だろう。

自分が学生の頃は魔法学校なんてほとんどなかったのに。おやつのモンブランを食べながら、サーリヤはそう思った。

二十一歳、恋人はなし。体の弱かった母はサーリヤが成人するより早く他界し、父は科学研究者（魔法の研究者と区別するためそう呼んでいる）だ。

サーリヤ同様、父ゴーベンも魔法があまり得意ではなかった。その分ゴーベンは理系面で優れていて、本人もそういったものを好んでいた。だから科学研究者になったのだという。

サーリヤの家は父母と娘の三人暮らしだった。そこを母が他界し、

結婚相手のいない一人娘と仕事の忙しい父が残った。

このままいくと二人で生活するのが普通だが、サーリヤももう年頃だからと家を用意してくれた。

家といっても今時珍しいほど小規模な家で、場所は元いた家のすぐ隣。別れを惜しむこともなければ、引っ越しだと胸を躍らせることもなかった。

こうして一人暮らしをしてもうすぐ丸二年なるサーリヤは、実に退屈な日々を送っていた。

そして、今日も例外なく退屈なのであった。

今日は平日だから、向かいの家に住むアメリカは今頃学校にいる。

十五の彼女とは何故か気が合うので、よく一緒に遊んでいる。サーリヤと違って魔法が得意で、本人もそれを誇りに思っている。だが、サーリヤはアメリカを嫌に思わないのである。

魔法が苦手でそのことをコンプレックスに思っているサーリヤから見て、魔法が得意で自信に満ちているアメリカには憧れを感じる。

たとえ相手が年下であったとしても、だ。

それに、アメリカは心身共に大人びた女の子だ。実際は六歳も年下なのだが、そこまでの歳の差を感じさせない。

「ペットでも飼えば少しは気が紛れるかも」

そう呟いてはみたものの、毎日動物を世話しなければならないかと思うと少々億劫だ。ペットを飼ったことなど一度もないものだから、どうすればいいのかも分からない。

食器を片づけようと立ち上がったとき、お皿に乗せていたフォークが床に落ちた。そのフォークを数秒見つめ、サーリヤは人差し指を向けた。

一秒、二秒。サーリヤはそのまま動かない。フォークはカタカタと音を立てるが、一切そこから移動しないでいる。

十秒経ったところで、サーリヤはがっくりと肩を落とす。十秒掛けてやっと床から一センチ弱ほど浮いたフォークは、サーリヤが手を下ろしたことでまた床に落ちる。

魔法の基本中の基本である、物体浮遊に挑戦したのだ。

通常、魔法でフォークを持ち上げるくらいのは誰にでもできる。だが、サーリヤにはそれができない。フォークが僅かに動くことから魔法が使えていることは分かるのだが、これがまた使えていないのと大して変わらない程度の腕前なのだ。

魔法が苦手でも運動が得意なら文句は言わないし、父のように勉強に優れているなら納得できる。

しかし魔法が苦手なサーリヤは、運動も勉強も特別得意というわけではない。

サーリヤが学生だった頃はまだ一般学校に魔法授業がなかったので問題なかったが、今、自分が学生なら間違いなく落ちこぼれになっただろう。

サーリヤは床に落ちているフォークを手で拾い上げ、お皿の上に戻した。

主流が魔法へと寄りつつある現代だ。一般学校も設けられているとはいえ、大抵の生徒は魔法学校を望む。

一般学校に入学する理由としては学費の都合（魔法学校の方が高額）か、魔法に不向きであるかのどちらかとされている。勿論通学に関する点など挙げればキリがないのだが、多くは上記の二つである。その二つのうち後者にあたって一般学校生をしているのが、サーリヤの目の前――アメリカの隣に立っているツェルビスだ。

「いらっしゃい。二人一緒なんて珍し……く、なかったわね」

言葉の途中で首を傾げ、サーリヤは苦笑を浮かべる。

アメリカが魔法学校九年生で十五歳のアメリカに対して、ツェルビスは一般高校二年の十七歳。同じ地区内に住む元気な男の子だ。

魔法が得意でないために魔法学校に通えなかったツェルビスはアメリカに強く憧れていて、よく彼女に魔法を見せてと幼い子供のようにねだっている。

「偶然帰りが一緒になったのよ。サーリヤさんの家に行くって言うたら、こいつが勝手について来て」

「駄目って言われてないもん」

「いいとも言っていないわよ」

「暗黙の了解ってやつだ」

「どうしてこうも自分に都合のいい解釈ができるのかしら。理解不能だわ」

噛み合っているような、いないような、何とも言えない会話はもう聞き慣れている。

ツェルビスがアメリカと一緒に行動したがるのは彼女に憧れを抱いているからだ、そのツェルビスがどうしてサーリヤの家にまで幾度も訪ねてくるのかは分からない。彼が一人で来たことはないからおそらくアメリカについて来ているだけなのだろうが、何も人の家に遊びに行くときまで同行しなくても。

そうは言っても、サーリヤは別にツェルビスを迷惑に思っていない。むしろ女二人に男一人というメンバーで気兼ねしないのかと思うけれど、彼の様子を見る限りその心配はいらなさそうだ。

「でも、人数は多い方が楽しいもんね。ねえ、ツェルビス？」

「あ……は、はい！」

何故か一瞬瞳を揺らめかせ、ツエルビスは大声で返事した。これが小学生ならいい返事だと先生に褒められていたことだろう。

「ツエルビスのおバカ」

呆れたように目を半開きにされて、アメリアが呟く。それにむつとしたツエルビスはアメリアを睨みつけるが、あまり迫力はない。

「何も顔が赤くなるほど大きな声で返事しなくても」

サーリヤの台詞に対しての反応は、三者三様ならぬ二者二様だった。

「もう一人いたわ」

とアメリアは肩を竦め、

「……」

ツエルビスは安堵のような落胆のような、何とも言い難い表情を浮かべていた。

科学と魔法 02

「なあ、何か魔法見せてよ！魔法！」

三人がリビングに腰を下ろすと、ツエルビスはお決まりの台詞を口にした。アメリカは『また？』と言わんばかりの面持ちで口を開く。

「大体、あんただって魔法は使えるでしょ？自分で努力しなさい」

「オレよりアメリカの方がすごい魔法使えるだろ？はい、それでは始めました！アメリカの魔法ショー！」

「え！？いきなり何なのよ！」

うろたえるアメリカなどお構いなしに、ツエルビスは満面の笑みで拍手を送っている。アメリカは案外場に流されやすいので、こうなったらもうツエルビスのペースだ。

「わー」

悪ノリした学生のような声音で、サーリヤも一緒に手を叩く。

「仕方ないわね……」

アメリカは立ち上がり、きよろきよと周囲を見渡した。対象物を探しているのだ。

その視線はサーリヤを捕らえたところで止まり、真剣な表情のまま顔も目線も動かさない。

当然びっくりしたサーリヤだが、声を上げたせいで魔法の邪魔をしてはいけない。魔法には集中力が欠かせないのだ。

「おー！」

ツエルビスが瞳を輝かせたことで、サーリヤは始めて魔法が発動したことを知った。魔法をかけられたのはサーリヤのはずなのに、サ

ーリヤに変化はない。となると、魔法種は視覚現象——つまり、幻覚を見せる魔法のことだ。

「私、どうなってるの？」

自分の体を見下ろしたが、これといった変化はない。自分の姿が本来の自分とは違うように見せられていることは間違いないのに、それが何なのかが分からない。もどかしい。

サーリヤは問いながらアメリカに視線を向ける。だが、答えたのはアメリカではなく身を乗り出したツェルビスだった。

「大人っぽくなってる！二十歳くらいには見えます」

「二十歳くらいにはって……私、実年齢二十一なんだけど」

「それは、えっと……」

ツェルビスが言葉を詰まらせていると、その脳天に拳が落ちてきた。殴ったアメリカは「落ち着きなさい」と母親のような口調でいつけるが、「いってー」と頭を押さえるツェルビスの耳には入っていないようだ。

「それだけ元が若い、ってことでしょ？」

「そうそう、それ！」

「ごめん、あんまり嬉しくない」

認めたくはないが、サーリヤは昔から童顔である。中学のときは小学生と間違われ、高校生のときは中学生だと勘違いをされ、二十一の今は十六、七くらいに見られる。良く言えば『若い』のだが、悪く言えば『子供っぽい』。

この外見だからこそ十五や十七の子供と仲良くやれているのかもしれないと思うと、一概に恨むことはできないのだけれど。

「でもすごいわ。視覚現象を人の顔に使えるなんて」

「私にとっては造作もないことですわ」

アメリカは胸を張って言った。普段は大人びた子だが、こうして素直に喜ぶ姿は年相応に少女らしい。

「ちよっと待ってて。バスルームの鏡で確認してくるから」

「もう魔法解けてますよ」

アメリカの言葉に、大人らしい顔立ちの自分を拝もうと上機嫌になっていたサーリヤは「そうなの？」と目を丸くする。はい、とアメリカは頷いた。

「そっかー。難しい魔法ほど、時間制限が短いもんね」

基本、人体に直接魔法をかけることは難しい。サーリヤができないのは勿論、アメリカの同級生だっておそらくは一人もできないだろう。

「何かもう、私だけ魔法社会に取り残されそう」

「魔法社会ねえ。確かにそうなりつつあるわね」

「てことはオレも危ないか。でもいいもんねー。魔法が駄目なら文学、それが駄目なら科学、それも駄目なら芸術」

「それらのすべてが苦手な人は？」

「ん？そんなやついんの？」

きょんとした表情でツエルビスが訊く。

「あんたよ、あ・ん・た！魔法学校の生徒に一般教科の勉強教えてくれて先週泣きついてきたのはどこの誰だったかしら？」

皮肉めいたアメリカの笑みに、ツエルビスは苦い笑みを返した。拳から防御するためのなのか、両手を頭の上においている。

「人間は元気が一番だ！」

「苦しいわね」「それはちよっと苦しくない？」

アメリカとサーリヤから言葉のダブルパンチをくらい、ツエルビス

は唸りながら自分の長所を探し始めた。
一週間後にはこの光景に変化が訪れていることを、今のサーリヤには知る由もない。

その由が初めて与えられたのは、三日後の休日だった。

特に用がないつもりでいたサーリヤ、床に寝転んで音楽プレイヤーを操作していた。一人暮らしなので誰の迷惑になるということはないが、音楽鑑賞はイヤホンでするのが数年前からの癖である。

そんなサーリヤの耳に、イヤホンを通る音楽以外の音が入った。電話が鳴っている。

サーリヤはプレイヤーの一時停止ボタンを押し、イヤホンを耳からはずす。その一連の行動の最中、サーリヤは電話をかけてきた人物を予想した。

今までの経験から考えると、一番ありそうなのはアメリカだ。次にありえるのは地区内の連絡網。もしくは何かの勧誘。ツエルビスはサーリヤの電話番号を知らないので可能性はなし。基本的に、電話で世間話をするような仲のいい人物は少ないのだ。

「もしもし」

もしもし、と返ってきた声は驚くべきものだった。

「父さん！？電話なんて珍しい！」

電話は隣の家に住むサーリヤの父、ゴーベンからだった。

多忙な上に別々に暮らすことになり、父と娘のコミュニケーションが減ったことは言うまでもない。こうして電話をすることは滅多にない———というか、もう何年も父からサーリヤに対して『用がある』と言われていない。もう子供ではないサーリヤの自立精神を尊重してくれているのだろうか。

「いきなり訪問したら驚くと思ったんだ」

「現に電話でもすごく驚いてるんだけど」

そうだな、とゴーベンは軽く笑った。父の声を久々に聞いた気がする。考えてみれば、金銭面で不自由したことのない家族だから、父から定期的に生活費を振り込んでもらっていることを当たり前前思っていた。なんて図々しいのだろう。

「ごめんなさい。私、お金を貰い続けてるのにろくにお礼も言っていない」

「どうした？急に殊勝になって」

「もう、人がせっかく謝ってるのに」

「俺は別に気にしてないからいいんだけどな。まあ、それはそうとして、だ」

父が無理やり話題を変えるのは、次に重要な話をするぞという合図だ。サーリヤは茶々を入れず、言葉を発しないことで先を促す。

「実は父さん、海外に行くことになった」

「はあ!？」

大声を上げるのは本日二回目である。電話の向こうでゴーベンが煩そうに受話器を耳から離す姿が脳裏に浮かぶ。

「それって、いつ？」

「明々後日」

「急すぎるわよ!」

憤慨するサーリヤを宥め、ゴーベンは海外進出の理由を説明した。無論、それは父の職業柄だった。国内では『空想論だけで成り立つ仮説にすぎない』と揶揄された企画があったが、それを実現可能にさせる国があるという。

すべてを知ろうと思えば小難しい話になるだろうと踏み、深くは追

究しなかった。おそらくゴーベンもそれを考慮し、かいつまんで説明してくれたことだろう。

「帰りはいつになるか分からない。生活費は定期的に口座に振り込まれるようにしてあるから……まあ、そこは今まで通りだ」

「うん、そうね」

言い方に問題があることを承知の上で言うと、ゴーベンが海外に行ったところでサーリヤの生活に大きな変化は訪れない（生活費の件はたった今解決した）。現に、こうして会話をするのも何ヶ月ぶりのことか。

「正直研究のことはよく分からないけど、頑張つて。いい結果がでたら真つ先に知らせてよね」

「当然だとも。……ただ、ちょっとした問題があつてな」

珍しく言葉を濁すゴーベンに、サーリヤの胸には不安が募る。何か大きなリスクがあるのだろうか。科学者の世界を把握していない故に、超展開ドラマのようなトラブルを想像してしまう。

「中にはどうしても持ち出せない研究データがあるんだ。処分なんてできないし、放置するわけにもいかない。頭を抱えているんだが……」

持ち出せない研究データの対処に悩んでいる、ということか。

処分と放置はゴーベン自らによって却下されている。となると、誰かが管理をするしかない。

「誰かに任せるしかないんじゃない？ ああでも、そんな大事なデータを任せられるような人……」

「さすが我が娘。察しが早くて助かった」

「え？」

「そのデータの管理をお前に任せようと思っている」

「なっ……！」

想定外の提案に、サーリヤはあんぐり口を開いたまま固まった。「もしもーし」とゴーベンの呑気な声が聞こえ、サーリヤはようやく我に返った。

「そんな大切なもの、私が管理しろだなんて無理よ！父さんの仕事のことはほとんど知らないし、魔法だって一人前に使えない……それなのに、そんな大事なことが務まるわけないでしょ！？」

「難しいことは何もないさ。まだ学会にも発表していないから、誰かに知られてもいない。お前はただ、それが『大切な研究データ』であることを隠していればいい」

「それが難しくないとでも？」

「どうせ一人暮らしだろう？今まで通りの生活をしていれば、情報が外に漏れる心配はないさ」

真剣に考えていても、どこかで思考が楽観的なのはゴーベンの悪い癖だ。が、納得できないこともない。

わざわざ任されたデータをネットワークに乗せることは絶対にしないし、出掛けるときにはどこかに仕舞い、鍵をかけていれればいい。さらに誰にも口外しなければ、情報漏洩は完全に防ぐことができる。ゴーベンが楽観的なのではなく、サーリヤが考え過ぎていたのかもしれない。

「そのデータって、父さんが渡しに来るの？あ、私また図々しいこと言っちゃった？私に取りに行こうか」

「いや、俺が出発する翌日にはそっちに行くだろう」

間髪入れない父の返答も不審だったが、それ以上に引っ掛かった言葉があった。

「『行く』？『着く』の間違いじゃなくて？」

「ああ、そうだな。着く。うん、着く、だ。間違いだ」

「父さん、大丈夫？何か喋り方が不自然だけど……疲れてるんじゃないの？」

「そう、だな？うん、きっと疲れてるんだ。今日は休むことにするよ」

「うん。それじゃあ……あ、ちょっと待って。切らないで」

「何だ？」

「わざわざ送らなくても、家が隣同士なんだから直接渡せばいいでしょ？」

あたかも当然のように言うサーリヤだが、実はついさっき気づいたばかりである。サーリヤでさえも気づくのだから、ゴーベンが気づかないというのはおかしい。どうやらそうとう疲れているようだ。

「そのデータは、今研究所にあるんだ。不用意に持ち出す必要はない」

「ああ、そっか」

やはり自分は父の仕事を何も知らないのだと引け目を感じながら、疲労の溜まっている父を気遣う言葉を言って電話を切った。

出発の日。

空港まで見送りに来たサーリヤは、父、ゴーベンの姿を見つけると小走りに駆け寄った。思ったより脚の自由が利かず、ロングスカートを履いてきたことを後悔した。

「いつてらっしゃい、父さん」

仕事用のスーツを着ているゴーベンはサーリヤを見下ろし、いつてくる、と至っていつも通りの声音で言った。

寂しくはないのだろうか。否、そんな疑問を抱く時点で勘違いをしている。

もう何年も別居状態が続き、まともに会話をしたのも数年ぶりのことだった。今更寂しさなんて感じるはずがない。現にサーリヤも、別れを惜しんで涙を流してすらいない。

「そうだ」

思い出したような呟きの後、ゴーベンはポケットから何かを取り出した。ゴーベンはサーリヤの首に手を回し、それをつけた。

「これは……？」

いいながら見てみると、それはグリーンのパendantだった。非ブランド主義（『安くていいものを』がモットー）のゴーベンのことだから、高級な宝石でないことは確かだ。生憎光り物には詳しくないのでよく分からないが、水晶だろうか。

それは深い緑をしている。深すぎて『光っている』とは言えない。でも、綺麗でないかと言われればそうではない。なんとも不思議な石だ。

「うちの御守りなんだ。成功祈願に持っていこうかと思ったんだが、お前に渡すよ」

「いいの？ 成功祈願」

「ああ。御守りが必要なのは、俺よりお前の方だろうからな」

「もう、心配性なんだから。私一人でも大丈夫よ」

「いや、大丈夫じゃないと思うぞ」

「何だよ」

「さっきの主張を聞いてそう確信した」

「だから何でなのよ」

ゴーベンは笑ってはぐらかし、サーリヤの問いにまともに答えてくれなかった。過保護、というよりはただ子ども扱いされているだけな気がする。

確かにゴーベンから見ればサーリヤは子供だが、こんな見てくれでももう二十一なのだ。二十歳を一年超えた人間を、世間では子供とは言わないと思う。

釈然としないでいると、ゴーベンが腕時計を見て「時間だ」と口にした。もう、これが出発するのだ。

「データがそっちに行ったら、しっかり管理してくれよなー」

「だから『行ったら』じゃなくて『着いたら』だってばー！」

慌てて走りながら手を振るゴーベンに、サーリヤも手を振り返した。

飛行機が出発する瞬間を見るのは、これが初めてではない。今の学校は知らないが、サーリヤが学生の頃、空港見学に行ったのだ。

本体に似合わぬ小さなタイヤが地面を離れ、飛行機はどんどん遠ざかる。

「寂しいなあ」

会話や対面がなくても、いるかいないかでは全然違う。

そのことを知ったのは、自分が発した言葉を理解してからのことだ。

君は何なの？ 01

ゴーベンが出発した、その翌日。今日はゴーベンの研究データが届く予定だ。

荷物が届くことを理由に、生活のサイクルを変える必要は全くない。外出を控えればいいだけの話だ。サーリヤは洗濯物を取り込み、それを畳んでいた。洗濯物と言っても、一人分の衣服と下着、それとタオルくらいしかないのですぐに済む。

畳んだものをたんすや脱衣所に片付け、ついでにお風呂掃除もしてしまう。運よく今日のスカートはミニタイプなので、裾をまくる必要はない。腕周りと足元をスタンバイし、お風呂掃除に取り掛かる。実のところ、サーリヤは風呂を掃除するが面倒臭くて嫌いである。

風呂場に足を踏み入れると、昨日ゴーベンからもらったペンダントをつけたまま入浴してしまったことを思い出した。あのあと急いで湯船から上がりタオルで拭いたので、錆になることはなかった。悪気はなくても、渡された御守りを粗末に扱ったと知ればゴーベンに怒られてしまう。

ごしごしとブラシをかけていると、チャイムの音が聞こえた。荷物が届いたのだろう。

「はーい」

タイミングの悪さを呪いながらも、サーリヤは明るい声で返事した。急いで手を洗い、袖を直し、靴下を履く。

「すみません。おまたせしちゃって――」

扉を開けた瞬間、サーリヤの動きと思考は一時停止された。次に再

生されるまで、たっぷり三十秒といったところだろう。

そこにいたのは、リュックサックを背負った男の子だった。歳はアメリカよりも更に幼いくらい。瞳の大きな可愛らしい顔立ちだが、何故か大人びた雰囲気を感じる。それが何故なのかと問われれば、サーリヤは分らないと答えるしかない。

不思議な、という形容動詞がしっくりくる。勿論いい意味で、だ。

「ええっと……家、間違えてない？」

うちにこの少年の遊び相手になれるような人はいないし、そもそもサーリヤはこの少年を知らない。知らない子供が一人で家を訪れた理由。そんなもの、間違い以外に何があるというのだ。

「間違えてないよ。サーリヤ・ヘンレッティだろ？」

少年がサーリヤの名前を知っていたことに驚いた。しかし、自分は大人なのだ。目前の少年とは、多分十歳近く差がある。

そんな子供の言うことにいちいち驚いている様ではいけない。そう思ったサーリヤは、努めて冷静を装った。

「そうだけど……何か用？あ、おつかいを頼まれたとか」

ズバリ言い当てたと思ったが、少年の機嫌を悪くしただけのようだった。ムツとした顔は、先程までとは打って変わって子供らしい。

「おつかいじゃない。あんた、父親から何も聞いてないのかよ」

少年の生意気な物言いに、今度はサーリヤがムツとした。敬語を使わないのは許容範囲だとしても、大人相手（まして初対面の）に『

あんだ』という二人称は、いくらなんでも失礼ではないだろうか。
台詞の後半も同様だ。

「……荷物が届くとしたか」

だが、名前も知らない男の子を叱りつけるほどおせっかいな性分ではない。不満に思いつつも、サーリヤは少年との会話に応じた。さすがに研究データのことは内緒だ。

「なんだ、ちゃんと聞いてるじゃん。それが俺だよ」

その二秒後、サーリヤが間抜けな返事をしたことは言うまでもない。

少年の話を鵜呑みにしたわけではないが、少年がサーリヤとサーリヤの父親について何か知っているということから、無視していい状況でないことは明白だ。

訝しく思いつつも、サーリヤは少年をリビングに通した。紅茶を出すそうとして、男の子が好む飲み物ではないかと思いつまり、ガラスコップにコーラを注いだ。

コーラの入ったコップを少年の前に置き、サーリヤは彼の向かいに座る。訊きたいことが山ほどあり、何から訊ねていいのやら。

「名前は？」

考えた末、無難な質問に落ち着いた。

「ノヴァイン」

「ノヴァインね。じゃあ……ノヴァインくん。君、私と父さんのこ

とはどれくらい知ってるの？」

「あんたの父親が科学者で、そいつがサーリヤ・ヘネッティっていう娘に研究データを託したってことは知ってる」
ここ数日間のあらすじをまとめられてしまった。

「そう」

どうしてノヴァインがそんなことまで知っているのか。それを問うのは、ひとまず後回しにしよう。

「もしかして、君が父さんの研究データを持ってきてくれたの？」
「持ってきたっていうか……まあ、そうなるか」

なんとも曖昧な台詞に、サーリヤは内心小首を傾げた。当たらずとも遠からず、ということなのだろうか。ならどうということだろう。

「まあいいや。とにかく、それをちょうだい」

「ちょうだいって……もしかして、聞いてないの？」

「父さんから、ってこと？ さっきも言ったけど、ノヴァインくんが言ったこと以外ではその研究データが今日届くとしか聞いてないわ」
「あんにゃろーめ、断られると思って言わなかったな？」

話がよく分からないけれど、ノヴァインの言う『あんにゃろー』が
ゴーベンのことだというのはなんとなく理解できた。

ゴーベンは、サーリヤに何か隠し事をしていたのだ。そして、ノヴァインはそれを知っている。

「教えて。父さんが私に言わなかったことって、何なの？」

思わず身を乗り出していたことに気づき、サーリヤは姿勢を戻した。
こんな子供相手に大人げない。

「研究データっていうのは、書類でもなければメモリーデータでもない。俺自身がそのデータだよ」

「ノヴァインくん、自身が？」

子供が大人をからかっているようにしか思えない。普通なら。

だが、ノヴァインはどういうわけかゴーベンとサーリヤのことを深く理解している。その上で、こんな性質の悪い嘘をつくだろうか。

「詳しく聞かせて」

半信半疑で、サーリヤは踏み込んだ。

「科学でも魔法でも、研究者が最も処分に困るものって何だと思う？ 今回の場合、持ち出せるようなデータは論外ってことで」

「重要なデータなら処分はできないわね。でも、持ち出せないとなると……」

「コンパクトじゃないものってこと」

コンパクトじゃないもの。ある程度の大きさがあり、凝縮不可能なもの。処分するわけにいかず、ゴーベンは放置も不可だと言っていた……。

「実験台にした生き物？」

正直、あまり考えたくないことだ。実験台にされる生き物というのは、やはりいいイメージがない。全部が全部グロテスクとは限らなくても、動物からしてみれば勝手に命を賭けられているのだから。

「正解」

ああ、否定の言葉が欲しかった。

君は何なの？ 02

「じゃあ私は、モルモットか何かの飼い主になればいいの？」

「いいや。実験台になったのはモルモットみたいな小動物じゃないから、それはない。飼い主になるんじゃないって……もう、面倒だから単刀直入に言うよ。俺がその実験台で、俺は今日からこの家で暮らす。あんたの父親が決めたことだ」

サーリヤは目を丸くし、何度も瞬きした。

ノヴァインが実験台で、研究データで、サーリヤはデーター——つまり、ノヴァインの管理を任されている。管理をするイコール同居する、という公式が完成した。

ゴーベンがサーリヤに言わなかったことというのは、このことだったのだ。任せたいデータとは、実験台にした男の子と同居すること。内緒にしたがるのも無理はない。こんなこと、前もって知っていたら断るに決まっている。

「心配しなくても、伝染ウイルスとか疫病とか、どういった類のものは一切持っていないから。外見も普通の人間と変わらないし」

言いながら自分の手を見つめるノヴァインの姿は、確かに普通の（というには独特の雰囲気のようなものがあるけれど）男の子だ。

こういう実験だったのだろう。素朴な疑問が湧いてくるが、それを問うのはいくらなんでも傷つけてしまうのではないだろうか。

きっと忘れたい記憶のはずだ。それを掘り起こされるような質問をされては、ノヴァインも気を悪くするだろう。

サーリヤはノヴァインの表情を窺った。

あどけなさのある真剣な顔が、何故か大人びた印象を与える。この

大人びた雰囲気は、どこからくるのだろう。実験台のことは関係しているのだろうか。

湧き上がる疑問をぐっと呑み込み、「よし」と明るい声を出した。

「分かった。よろしくね、ノヴァイン。確か物置にしてる部屋があったと思うから、狭いけどそこを片付けて使って」

そうだ、冷蔵庫の食材も一人分しかない。後で買い物に行かなくて
は。

物置まで案内しようと部屋のドアの手間まで来たところで、ノヴァインを振り向いた。その瞬間、

「なあ」

頬杖をついた状態のノヴァインが言った。

「何でそんな簡単に納得できるわけ？ 疑わないのかよ。どう考えてもおかしいだろ？」

その声は恐ろしい程冷めていて、サーリヤは自分がぞくりとするのを感じた。

まだ四捨五入しても二十歳にならないような子供が、何を抱えて、何を思って、こんな喋り方をするのだろう。

ゴーベン
はノヴァインを実験台にしたとき何を思い、どういう気持ちでノヴァインをサーリヤに託したのだろう。

ゴーベンとノヴァインの関わりは、ノヴァインの心にどれだけ影響を与えているのだろう。そして、その逆もありえるのだろうか。

「だって、父さんに頼まれたんだもん。君を……ノヴァインをよろしくって」

それでも、ノヴァインは笑顔にならない。

部屋案内するね、とサーリヤが言うとノヴァインは「うん」と言っ
てついでにきた。

物置に使っている部屋がある。それは半分本当で、もう半分は嘘と
言えなくもない。

嘘が指しているのは『物置』ということではなく、『使っている』
という部分だ。

確かに物置部屋は存在しているが、使わないものを放り込むだけ放
り込んで長らく放置していた。開かずの間、と呼ばれてもおかしく
ない現状である。

おそらく、否、絶対に、この扉の向こうは不衛生な状況になってい
るに違いない。

固唾を吞んでから、サーリヤはドアノブに手を掛けた。恐る恐る、
それを前に押す。

「うわあ……」

隙間から覗いてみると、想像通りの光景が広がっていた。思わず嫌
な声が漏れてしまう。

サーリヤは静かに扉を閉めると、背中をドアにつけて苦笑した。

「ある程度片付けちゃうから、リビングで待ってて」

「いいよ。俺の部屋になるんだし、俺も片付ける」

出会い頭は生意気な口を利いてきたくせに、今回に限って感心なこ
とを言う。今は図々しくサーリヤに片付けを任せてくれた方が嬉し
いのに。

「そんなに散らかったんの？」

「散らかってるっていうか、無様っていうか……」

「俺そういうの気にしないから大丈夫だって。ていうか、物置って基本散らかってるものだし」

「ああ、ちよつと……！」

言いながら、ノヴァインはサーリヤを押しつけてドアノブに手を掛けた。

「それに片付けなんてさっさと終わらせたいし」

どうも言うことが殊勝だと思ったら、それが本音だったのか。

と、サーリヤが思っている間にも、ノヴァインの動作は進んでいた。ドアが開いたかと思うと、ノヴァインはドアノブから手を離さないまま顔をしかめた。

「きたなっ」

「分かり切ってることを言わないの」

しばらくぶりに開け放たれた扉の向こうは、無様な光景が広がっていた。埃っぽい部屋の空気に、積み重ねられたダンボールの山。しかも綺麗に積まれているならまだ許せるものの、それはまさに山の形に積み上げられている。物置部屋に入れておけばなんとかなる、という無秩序な考えの終末である。

「一体何をどうしたら、あんな悲惨なことになるんだよ。何年間放置してたの？」

悲惨とまで言われてしまった。

「最初の方はよく掃除してたんだけど、段々面倒になってきて……」

「散らかってても気にしないとは言ったけどさ、限度ってものがあるだろ」

「はあい……」

片付けを怠っていたことは心から反省している。何でも手間だ、億劫だ、と言っていてはいけないのだと思い知った。

だが、何が嬉しくて今日会ったばかりの子供に説教されているのだろう。どう考えても非があるのはサーリヤの方なので文句を言う筋合いはないのだが、大人としての威厳を崩されたようで気分が悪い。サーリヤとノヴァインは物置部屋の整理をすることにした。ダンボールのうち半分近くが空箱だったことに、サーリヤ自身も驚いた。おそらく何かに使えるかとも思い、捨てることをためらっていたのだろう。無論、空箱たちは処分することに。

他の箱に入っていたのは、古本や古CDがほとんどだった。失くしたと思ったものも大量に出てきて、いかに整理がなっていないかを見せつけられたようだった。

ようやく部屋の中が落ち着いて、サーリヤは両手を床について天井を仰いだ。高い声と共に息を吐きだし、首を回して周囲を見渡す。部屋はすっきりしたものの、次は『これは必要』とみなしたものを片付けるという作業が待ち受けている。物置部屋が使えないとなると、一気に収納スペースがなくなってしまう。一難去ってまた一難。サーリヤは両手を前につき、肩を落とした。

「それ、買ったの？」

ノヴァインが何のことを言っているのか、すぐには分からなかった。しばらくして、サーリヤがつけているペンダントのことだと理解した。前屈みになったから、目に入ったのだろう。

「父さんから、出発するときにもらったの。何でそんなこと訊くの？」

「さっき整理したとき、アクセサリーなんて一個も出てこなかった

から」

サーリヤは普段アクセサリーをつけない。嫌っているわけではないが、特別好んでもいない。要するに、わざわざ買ってまでつけたいとは思わない、ということだ。

「アクセサリーはあんまりつけないから」

「あんたの父親も、どうせプレゼントするなら娘の使いそうなものにすればよかったのに」

「プレゼント、とは違うと思う。御守りだって言ってたから」

「御守り？ ネックレスが？」

「そうみたい」

「変なの」

サーリヤはチェーンを指でつまみ、深緑の飾りを目の高さまで持ち上げた。

角度を変えてみても、深い緑に光は差さない。それでも綺麗だと思うのはどうしてだろう。

ゴーベンからもらったペンダントといい、突然訪れたノヴァインといい、サーリヤの周りには不思議なことが多すぎる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3989ba/>

うちの猫は魔法が使えません

2012年1月12日18時56分発行